

平成 28 年度霞ヶ浦学講座 第 12 講 実施報告

実施日時：平成 29 年 3 月 12 日（日）13:30-15:30

場所：霞ヶ浦環境科学センター多目的ホール

講師：沼澤 篤（霞ヶ浦環境科学センター嘱託） 参加者数：49 名

テーマ：「霞ヶ浦の歴史 1—古代～近世（常世の国—ダイナミックな内海世界）」

要旨：「霞ヶ浦の歴史」は集大成中です。市町村史編纂事業等では出土品、古文書、漁撈具、民具などの史料に基づいた研究が蓄積され、全体像の体系的な把握を目指しています。

古代前期（縄文、弥生、古墳）の霞ヶ浦周辺における自然と社会の状況は、貝塚や古墳の調査によって詳細に研究されています。奈良時代初期頃の状況は常陸国風土記の記述によって具体的に知ることができます。それらに依れば古代常陸国はヤマト王権の影響を受けながらも、水陸のサチに恵まれた「常世の国」でした。まだ霞ヶ浦という呼称はなく、水域ごとに香取の海、行方の流海、佐我の流海、信太の流海などと呼ばれていました。鹿島神宮はヤマト王権の東国開発の祭神として位置づけられ、常陸国は陸奥平定の重要な拠点でした。当時の東海道は霞ヶ浦周辺の陸路、水路を経て国府（現在の石岡市）に達していました。

中世（平安、鎌倉、南北朝、室町、戦国）の霞ヶ浦沿岸の人々は各地の津に拠り、漁撈、水運による商い、湿田農業に勤しむ一方、中央と地方の権力（常陸平氏や在地武士団）、香取神宮、鹿島神宮による複雑な支配を受けながらも、課税根拠や住民移動の規制が弱かったことから、比較的豊かな暮らしを営み、自由で磊落な気風を培っていたようです。当時は中央の統治権力が東国に及びにくい地政学的背景があるものの、平将門の乱、関東管領の上杉氏や北条氏の支配、小田氏や佐竹氏の台頭、南北朝期の争乱、戦国期を経て、天下統一への過程に常陸国・霞ヶ浦周辺も巻き込まれました。一方、海夫が躍動し湖賊が出没する霞ヶ浦は、人、物資、情報、文化が交錯する「常総の内海世界」とする位置づけが歴史家によってなされています。いわば霞ヶ浦は「ミニ地中海」でした。

近世で幕藩体制が確立すると、江戸が政治経済の中心となり、霞ヶ浦沿岸地域は商圈に組み込まれ、高瀬船による水運が隆盛し、物資や人の移動によって江戸文化との交流が盛んに行われ、土浦、江戸崎、小川、高浜、潮来などの主要な津は河岸としておおいに賑わいました。伊勢や近江の商人が霞ヶ浦沿岸に拠点を構え、常陸の物産（米、醤油、清酒、木材、薪炭等）を江戸に運び、帰船には下り物の呉服、雑貨品、塩、糞糟（肥料）などを積み込み、活発な商いを行っていました。その経済活動は明治期を経て今日まで続いています。江戸期後半、沿岸の津は次第に水戸藩や幕府の支配下に置かれ、海夫の子孫による自治は弱体化していきました。

一方、利根川東遷や浅間山火山噴出物の影響で、霞ヶ浦沿岸地方は水害常襲地帯となり、土砂堆積による洲が出現し、新田開発が促進されました。水害対策の普請（洲浚いや水行直し等の土木工事）に沿岸住民が半強制的に動員され、一部で反発を受けました。それらは今日の河川改修、築堤、干拓、水害対策、土地改良、霞ヶ浦開発へと繋がっていきます。